空虚なシニフィアン (An empty signifier) は、厳密にいえば、意味を持たない記号表現である。しかしながら、この定義は問題の言明にもなる。というのも、記号表現が特定の意味に付着せず、意味 (signification) の体系の不可欠な部分であり続けることは果たして可能なのか？空虚なシニフィアンは音の連続となり、音の連続が何らかの意味機能を失うならば、「記号」という用語自体が超越的なものとなるだろう。もしも、空虚なシニフィアンの可能性が含む記号 (sign) の転覆を通じて、そのような意味に内在する何かに達成するならば、音の流れが記号であり続けている特定の意味から分離される可能性はある。この可能性とは何か？

仮の答えは即座に放棄され得る。一つは同じ記号表現が (記号の恣意性の結果として) 異なるコンテクストにおいて異なる意味に付着することができると主張することだろう。だが、この場合に記号表現が空虚 (empty) ではなく曖昧 (equivocal) なものとなるのは明らかだ。相互のコンテクストにおいて意味機能は十分に実現しているからだ。二つ目は、記号表現は曖昧 (equivocal) ではなく不明瞭 (ambiguous)であるという可能性がある。すなわち、意味の過剰決定にしても過不足決定にしても、それはその十分な修正を妨げる。しかし、この記号表現の浮遊は依然としてそれを空虚なものにしない。浮遊は私達の問題の適切な答えへ向けて一段階進めてくれるが、後者の用語はまだ避けておく。私達は記号の過剰あるいは欠如ではなく、意味の過程の内部からそれ自体の境界の推論的配置に至るまでを示す何かの的確な理論的可能性を扱わなければならない。